猿飛佐助

柴田錬三郎自選時代小説

猿飛佐助

柴田錬三郎自選時代小説全集 一巻

猿飛佐助
『柴田錬三郎自選時代小説全集』　巻一四

初版印刷＝昭和四九年九月一〇日
初版発行＝昭和四九年九月二〇日

著者＝柴田錬三郎

発行者＝陶山巌

装幀者＝横尾忠則

編集＝株式会社サン・パブリシティ
郵便番号＝〈一〇一〉
東京都千代田区神田神保町一ノ二九ノ四
電話番号＝〈〇三〉二九四ノ二七八一

発行所＝株式会社集英社
郵便番号＝〈一〇一〉
東京都千代田区一ッ橋二ノ五ノ一〇
電話番号＝〈〇三〉二六五ノ六一一一
振替＝東京一五六五三番

活版印刷＝中央精版印刷株式会社
オフセット印刷＝凸版印刷株式会社

著者との了解により検印を廃止します
0393—170014—3041
© 1974 R. SHIBATA PRINTED IN JAPAN
定価はカバーに表示してあります

猿飛佐助————目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

猿飛佐助――――九
霧隠才蔵――――二四
三好清海入道――――三九
柳生新三郎――――五五
百々地三太夫――――七四
豊臣小太郎――――九二
淀君――――〇九
岩見重太郎――――一二七
真田大助――――四五
後藤又兵衛――――一六一
木村重成――――七九
真田十勇士――――一九七
柳生但馬守――――二一五
名古屋山三郎――――二三三
曾呂利新左衛門――――二五一
竹中半兵衛――――二六九
佐々木小次郎――――二八四
抜刀義太郎――――二九八
清酒日本之助――――三一五
風魔鬼太郎――――三二九
山田長政――――三四四

徳川家康――――――――三五八
伊藤一刀斎――――――――三七二
大阪夏の陣――――――――三八七

猿飛佐助

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

猿飛佐助

（一）

天正十年三月十一日、武田勝頼は、天目山の麓の田野という村里の仮屋で、織田信忠の軍勢五千に包囲されて、屠腹し、ここに武田家は、滅びた。

——もはや、これまで！

と、覚悟した勝頼は、重臣某に、無言で頷いてみせた。

心得た重臣は、直ちに、不動明王の画像を描いた巨大な朱塗り太鼓を、摺り搏ちに、四十九打した。この太鼓は、戦国武将中屈指の仏教信仰者であった武田信玄が、曹洞禅に参じた際、信濃の竜雲寺の北高全祝から、贈られた家宝であった。

信玄は、北高全祝を来世首魁の師として崇敬していたので、常に、傍に据えて、おのが運を、その鼓音に托した。すなわち、出陣にあたって士気を鼓舞する際には七打し、戦勝を祝う時には十三打するといったあんばいに、またその打ちかたも遅速自在に変えるように定めていたのである。

そして、遺言の中にも、

「武田家が滅びる日には、摺り搏ちに四十九打せよ」

という一条を加えておいたのである。

その日が、ついに来たのである。

その一打一打に合せて、仮屋にめぐらした柵に、つぎつぎと、燃えるような緋色の幟が、立てられていった。

太鼓が鳴りおわった時、仮屋は、四十九本の赤い雲罕によって、包まれた。

織田の軍勢も、これが、武田家の降旗と知っていたか、急に、矢弾を撃つのを止め、鯨波を絶った。

天地は、嘘のように、静寂に還った。

勝頼は、重臣に、

「妻は、いかがいたした？」

と、訊ねた。

重臣は、俯いて、

「侍女二人の供にて、恵林寺へおもむかれました」

と、こたえた。

勝頼の妻蘭渓は、曾て甲斐恵林寺の和尚快川に就いて参禅したことがある。快川は、信玄の請じた名僧で、後日、織田信長によって寺院を焼かれるや、

「心頭を滅却すれば、火もまた涼し」

とうそぶいて、紅蓮舌になめられつつ、従容として示寂している。

勝頼は、妻が、その実家である小田原へ帰らずに、禅

寺に行ったことに、微かな満足をおぼえた。
妻は、臨月の大きな腹をしていた。
――快川ならば、かくまって、生ませてくれるであろう。
勝頼は、妻が生むのが、必ず男子であり、それが、将来武田家を再興してくれるような予感がしていたのである。
かたわらに、今年十六歳の長子信勝が、坐っていたが、これは、病弱であり、気性も弱かったので、おのれに殉じせしめる肚であった。
「では、逝こうか」
三十七歳の勝頼は、六十歳の老爺のようにのろのろとした動作で、短剣の鞘を払うと、
「信勝、父が作法に倣え」
と、云った。
すると、生きた心地もない様子でいた信勝が、血の気のない顔面に、にわかに、慴怖の色をあふらせて、
「父上！　わ、わたくしは、死にたくありませぬ！……生かして下され！」
と口走って、平伏した。
勝頼は、叱咤しようとして、信勝の項の、女のように白く細いのを一瞥すると、口をつぐんだ。
終日、書物をひもといていれば、それで満足している少年であった。武将の子に生まれたのがあやまっていたのである。学者としては一流になり得る頭脳をそなえているに相違なかった。
ふびんさに、当惑している勝頼を、じっと瞶めていた重臣が、
「殿――」
と、呼んだ。
「それがしに、若をお救いするてだてがござる」
「あるか？」
勝頼は、思わず、迂愚な父親の表情になった。
重臣は、胴にはさんでいた鉄製の呼子を把って、口にした。
鋭い金属音を合図に、影のように音もなく、一人の人物が入って来た。
黒衣で全身をつつんでいたが、その左腕と右脚は、無かった。黒光りする義手義足をつけていた。
「数年前よりやとい入れて居り申した忍者でござる。戸沢白雲斎と申し、秘術抜群なれば、若をお落し申し上げることは、さほど至難ではござるまい」
重臣とすれば、信勝のような臆病者を生きのびさせることに、なんの熱意もないので、口調は冷やかであった。

（二）

それから、半刻ののち、四十九本の赤旆が、同時に、

音もなく、地べたへ倒れた。
「おう——武田勝頼の自刃がおわったぞ」
粛としてしずまりかえっていた包囲陣は、にわかにどよめいて、どっと、柵をのりこえて、仮屋へ殺到した。
惨たる死の世界が、そこに、あった。
およそ二百名をかぞえる人々が、おのおのの座をきめて、武田家の面目を保つ見事な最期を示していた。
織田信忠は、勝頼の屍骸を検てから、ふと気がついて、
「信勝の死体がないぞ」
と、叫んだ。
奇怪なことだった。包囲陣を突破した者は一人もなかったし、さして広くもない仮屋はすでに隅々まで探索して、生きた人間を一人も発見してはいなかった。
信勝という少年一人だけが、煙のように消えうせていたのである。
「もう一度、丹念に、調べい！」
下知とともに、士卒は武具を鳴らして、再び八方に奔った。
やがて、発見した生きものといえば、炭小屋に、藁束を褥にして、寝そべっているいっぴきの大きな白犬であった。
ちょうど、母親のつとめをはたしたばかりで、小さな蠢くものを、その腹にすがらせていた。
どやどやとふみ込んで来た人間どもを警戒して、首を擡げると、ひくく唸った。
「ほほう、畜生のあさましさよ、主人が他界したと申すのに、六匹も生んで居るわ」
しかし、この平和な光景は、戦士たちの荒だった神経を、ふと、なごませる効果がなくはなかった。
仮屋に火がつけられ、その煙が、この小屋にも這入って来はじめた時、白犬は、子犬どもをはねのけて、むっくりと起き上がると、おのが皮を剝いだ。
中から現われたのは、忍者戸沢白雲斎であった。
すばやく、藁束をはねのけると、穴底に据えた鎧櫃の蓋をはずして、死んだようにぐったりとなっている少年を、ひきずり出した。
ところで——。
織田方にも、秘術を備えた一流忍者がいた。
地獄百鬼というその忍者は、織田信長が、自ら、木曾山中におもむいて、忍び谷とよばれる忍者部落から、面だましい秀れたのをえらんでやとい入れた一人であった。
忍者になるために生まれて来たような若者であった。
無口で、無表情で、非情で残忍で、行動の大半を謎につつみ、尋常の人ならばたすからぬほどの深傷を負うても、常のごとく振舞って、他人に気づかせぬ体力と忍耐心を持っていた。

百鬼は、本陣わきのくさむらに寝そべって、彼方の仮屋が、炎々として燃えあがるさまを眺めていたが、ひきあげて来た人々の会話を、陣幕の内にきくや、とたんに、すっと身を起していた。

武田信勝の姿が、煙のように消えていたこと。炭小屋の中に、子を生んだ犬いっぴきがいただけであったこと。

それだけきくと、百鬼の神経が、冴えたのである。

百鬼の姿は、そこから消えた。

次の日の午、戸沢白雲斎は、信勝をかるがると背負うて、木立のふかい天目山の急勾配の間道を、登っていた。

隻脚であり乍ら、黒い義足は生きているように動いて、その速度は、普通人が走るのよりもまさっていた。

中腹の、やや平坦な地点へ達すると、頭上を掩う樹冠は、さらに濃くなり、春の陽はその上に眩しくかがやき乍ら、地上まで落ちて来ず、その昏さが、鳥の声もせぬ静寂を、ぶきみなものにしていた。

すたすたと行き過ぎようとした白雲斎は、ふと、その出足を停めた。

小花が散るように、まっ白い、小さなものが、面前に、ばらばらと、降って来たからである。

地面に落ちたそれを見れば、米粒であった。

それは、みるみる、ひとつの文字を、土の上に、書いた。

死

それであった。

白雲斎は、しかし、頭上を仰ぎもせず、すっと、一間ばかりあと退りしてから、信勝をせなかから、おろした。

「この場所を動いてはなりますまいぞ」

きびしく呟附けておいて、白雲斎は、ゆっくりと、大股に、「死」の上を、またぎこえた。

それから、腰に携げている革の小袋から、小さな珠をとり出すと、無造作に、宙へ投げた。

白煙がぱっと拡った。そして、それは、若い女の美しい裸身が身もだえるように、ゆるやかにうねっていたが、やがて、鮮やかに、ひとつの文字を描き出した。

生

と、読めた。

白雲斎は、空中から米粒を落して、地べたに、「死」という一文字を書く地獄百鬼という忍者のことを知っていて、これに対して、おのが特技をもって応えてみせたのである。

二間のむこうに、黒影が、湧くがごとく出現した。

白雲斎は、にやりとした。強敵と秘術を競うのは、ひさしぶりのことであった。

対手は、二歩ばかり進み出て、
「戸沢白雲斎——犬に化けて、武田の御曹子を救うたとは、見事だ。この地獄百鬼が、御曹子の首をもらうぞ」
昂然と、うそぶいた。
白雲斎は、無言で、待つ。
百鬼は、さらに、二歩を迫った。
——これは、若い！
白雲斎は、百鬼が、まだ二十歳をこえて間もないのを、直感した。白雲斎は、すでに五十の坂をこえていた。
まともに闘っては、体力の消耗差によって、敵うべくもない。
不意に、白雲斎が、一喝した。
「何をおそれるぞ、百鬼！」
「なに?! おそれるとは！」
「飛翔の距離に来て、迷うとは、見苦し！ 血気ならば、飛べいっ！」
白雲斎は、老獪にも、百鬼が、飛翔の術を使うべく、四歩を進み乍ら、その地点で、ふっと、一瞬の迷いを生じたのを、看破したのである。
「ふん——」
百鬼も、さる者、誘発には乗らず、一瞬、右手を旋回させた。一条の綱が、掌の内から、飛び出して、矢のように、白雲斎めがけて、襲って来た。
ただの綱ではなく、数千本の針が、毬のように、植えられている凶器であった。
狙うところは、頸である。ひと巻きに巻けば、無数の針が、頸を刺して、一刹那にして、勝負は決まる。白雲斎は、その義手で、無造作に、これを受けた。
針綱は、毒蛇のように、義手の手くびに巻きついて、百鬼の手もとから、ぴーん、と一直線に、張った。
百鬼は、渾身の力を罩めて、ひきしぼる。白雲斎は、ほんのしばし、そのおそろしい力に堪えていたが、
「……むっ！」
と、ひと息詰めざま、右半身にひねった。
瞬間——義手は、白雲斎の左肩から、すぽっと、抜けて、針綱にくるくると巻かれつつ、宙に躍った。意外、白雲斎の左腕は、煌たる白刃と化して、閃いた。すなわち、義手には、一尺五寸の剣が仕込んであったのである。
百鬼が、その義手を噛んだ針綱を、大きく、空に旋回させて、凄い唸りを生みつつ、飛ばして来るや、白雲斎は、この手剣で、これを両断した。
次の刹那には、おのれの方から、地を蹴って、五体を、宙のものにしていた。
しかも、地を蹴るや、義足を膝から抜きとばしていた。義足もまた二尺の剣を仕込んでいたのである。
先年、不運にして、隻腕隻脚となった白雲斎は、その

片端を逆に利用して、これにつけた義手義足に、白刃をひそめたのである。

百鬼の頭上を翔けぬけざまに、手剣と足剣を、同時に、斬りあびせた白雲斎の迅業は、鬼神に似た——。

百鬼は、むざとは斬られず、腰の一刀を抜く手も見せずに払って、足剣を半ばから両断する秘術を見せたが、手剣に顔面を薙ぎ斬られるのを、躱すいとまはなかった。

白雲斎が、一間のむこうに降り立った時、百鬼は、大きく跳んで、距離をはなしていた。

「しまった！」

呻きを発したのは、白雲斎であった。

その場所を動くな、と命じておいたにも拘らず、信勝が、地面に書かれた「死」の一文字を見る恐怖に堪えられずに、こちらへ走り寄ろうとしていたのである。

百鬼は、血まみれの顔面を、ぶるっとひと顫いさせるや、風のように、信勝の脇を、駆け抜け去った。

駆け抜けつつ、一颯の刃音を鳴らした。

信勝の首は、宙に刎ねとんだが、百鬼が、躍りあがって、それを受けとめて、小脇にかかえ込む光景は、白昼夢のように、白雲斎の眼裏に、のこった。

百鬼は、右眼を喪った代りに、信勝の首を、首尾よくせしめたのであった。

白雲斎には、百鬼を追う体力はなかった。たとえあっても、胴をはなれた首を、とりかえすのは、無駄であった。

「わしも、老いた」

白雲斎は、手剣足剣を、義手、義足に納めて、歩き出し乍ら、呟いた。五年前ならば、空中から、百鬼の首を刎ねる秘術に、みじんの狂いもなかった筈である。

忍者が、老いをおぼえる。これほど、悲惨はなかった。

（三）

信勝の首級を地獄百鬼に奪われた白雲斎には、なお、もうひとつ、任務がのこっていた。

武田勝頼夫人を守護して、無事に出産させるように、重臣から、依頼されたのである。

勝頼夫人は、北条氏康の六女であった。勝頼に嫁したのは、天正五年、十五歳であった。すなわち、いまは、二十歳である。勝頼は再婚で、さきの妻は、織田信長の養女であったが、長子信勝を生むと間もなく病死していた。

北条氏政が、末妹を、勝頼にくれたのは、関東へ伸びて来る上杉方の勢力を押えるために、武田と同盟をむすぶ——いわば、政略のひとつであった。

しかし、夫人は、勝頼のこよなき伴侶となって、嫁した翌年、勝頼が兄氏政と不和になり、公然と敵対するに

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.